

---

# ひとりぼっちの運命

原木野徹也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひとりぼっちの運命

### 【Zコード】

Z5071D

### 【作者名】

原木野徹也

### 【あらすじ】

僕はいつだって一人で生きてきた。今更そんなものいらない、『愛』なんて知らない……。REBORNの雲雀さんのキャラソンから妄想でできた小説です。ネタバレがありますので注意をお願いします。

## 愛なんて知らない（前書き）

I LOVE雲雀ーーつてくらいこ雲雀をまのじどが好きですが、性格とか喋り方とか実はよく分かっていません。そのとじゅうをよろしくお願いします。

## 愛なんて知らない

そよそよと涼やかな風が吹く中、彼は屋上のフェンスに腕を預けていた。

彼の肩の上では、小さな黄色い鳥が微妙にずれた音程で彼の愛する並森中校歌を唄っている。

背後から、キイ、と扉が開く控えめな音が聞こえた。  
誰かがこっちに向かつてやってくる。

その「誰か」がだれか、彼には分かつていた。

ぱわわっと肩に乗っていた鳥が羽ばたいて、すぐに見えなくなる。

五歩ほど離れた彼の後ろで、その誰かは足を止めた。

「やあ」

誰かが口を開く前に、彼は振り向くことなく短い挨拶を口にする。  
あつ、あの……、と少しどもりながら、相手もこんなにちは、と挨拶を返した。

その言葉を聞いてから彼はゆっくりと振り向く。かしゃん、とフェンスに腕を組んでもたれかかった。

振り向いた先、彼の目の前にはあの草食動物 沢田綱吉がいた。

沢田綱吉は、少し前までは学校は連絡もなしに休む、制服はきちんと着ない、最近では半裸で校内を動き回つたりと、彼の美德に反する、風紀を乱す生徒だった。

一度噛み殺してやろうかと思ったこともあるが、あまりにもひ弱な草食動物だからと興味もなかつた。

あの赤ん坊と出会つてから、少し変な奴だと思いなおしたが、それでも赤ん坊に興味があつただけで、この生徒には指して興味もないままだっただけど。

むしろいつも三人で群れていて、見てるだけで苛々することが多かつたと思う。

そのすべての考えが変わつたのは、ついこの間のこと。

夜の校内の激しい闘い。

照明によつて明るく照らされた校庭で動き回る沢田綱吉は、額と両の手から変な炎を出していた。

それはいつも学校で見かける沢田とはまるで違つて、少し興味を持つた。

あの草食動物となら一度闘つてみたい。

そう思ったのだ。

だがそれは、今ここにいる綱吉ではない。

今の彼には興味もないし、むしろ闘志の全くない綱吉の眼は苛々するものだった。

「あの… つ、雲雀さん」

「なに。話なら早くしてよね」

雲雀がそう、と、綱吉はびくつと背筋を伸ばした。  
少しおびえて、いるよひにも見える。

その表情が、なんだか好ましく思えた。

おびえた顔を見るのは嫌いじゃない。

「は、はこつ。ただ、その、……雲雀さんといちやんと、おひこまつりおひこまつり  
と思いまして」  
「だからなにを」  
「あの……、この間はありがとうございました」

そのありがとうが何なのか雲雀にはすぐに分かつたが、何も言わ  
ない。

「雲雀さんのおかげで、俺も、みんなも無事で、指輪も全部手に入  
つて……ほんとに感謝します」  
「……別に。僕は強い奴と戦いたかっただけだし。学校で死なれて、  
風紀が乱れても困るからね。君たちに協力したわけじゃない」  
「そうですね。……でも」

綱吉は少しおびえたふうに笑うと、落としていた視線をあげて雲  
雀を見上げた。

「でも、それで俺たちは助かったんですね。ありがとうございます」  
「…………」

雲雀は何も言わないで、ほとんど表情をかえずに綱吉から目線を  
そらす。

「えっと、それと……」「

「まだあるの?」「

「はい、あの……、リボーンから言われて」

「あの赤ん坊から?」「

「はい」

リボーン、とこう召前を聞いて雲雀はフロンスから身を起した。  
綱吉がびくつと身体を震わせる。

「礼と、それから、これからもよろしくお願いします、を言って来て  
わざてたんだけど。」

綱吉はやう思いながら曖昧に微笑む。

「あの、これからも、よろしくお願ひします」

そう言つて、すつと手を差し出した。

その手がかすかに震えているのに、雲雀が気がつかないわけがな  
かつた。

「これからも?」

苛々と綱吉の言葉を繰り返す。

「知ってるでしょ、君も。僕は群れるのが何よりも嫌いなこと。こ  
れからなんて、あると想つの?..」「

「いや、その、えっと」

(あーもー、だから言つたのこボーンのやつ……雲雀さんを止めるとか無理だつてー。)

視線を泳がせながらじっともじりと言葉を考へる。

「でも、あの……、雲雀さんが群れたくないつて思つても、その」

「だからなんなの。はつきり言こなよ」

雲雀の言葉に、綱吉はまつすぐ雲雀を見つめる。

覚悟を決めたように息を吸つて、次に見えた眼に迷いはなかつた。

その眼に雲雀の背がぞくつと泳ぐ。

「あの……、俺はもう、雲雀さんのこと、仲間、だつて思つて……」

…

“仲間”。

この間も、そのようなことを言つてこた。

炎と同じ瞳の色をして、まっすぐに相手を見据えて。

瞳の色に違つもの、その強いまなざしはあるの時と同じだった。

ぐるりと反転して、また綱吉に背を向ける。先ほどと同じようにフヨンスに腕を預けた。

「……言つたことはそれだけ?」

そう言つと、綱吉がびくつ身体を震わせたのが見なくても分かつ

た。

「えつと……はい、それだけ……、です」

「用がすんだなら帰りなよ。あそこで待つての、君の犬じゃないの？」

校門の向いに立つて、一つの影のつが、苛々と動き回っている方の影を指す。

綱吉が指の先を覗き込んで、あつと声をあげた。

「獄寺くんー山本ー帰つててつて叫つたの?」

その声が聞こえたのか否か、獄寺はぱたとこっちを向いて、ひらひらと手を振った。

同時に尻尾も振つてゐるようだ。

「早く行きなよ。今回は見逃すけど、これ以上群れてると見せたら死んでしまうよ。」

ジャキッとしたワンの中に仕込んでいるトンファーを取り出す。

日光に煌いて、銀色に光つた。

「ひこッーーー」めんなさーーー、今すぐ帰りますーーー

慌ててそう叫つと、ペニッと勢いよく頭を上げていつも彼からは信じられないほどのスピードで扉へと向かつ。

「沢田綱吉」

彼が屋上から去る寸前、雲雀は顔だけ振り向けて綱吉を呼びとめ

た。

急ブレーキをかけて、綱吉が振り向く。

「僕は君の仲間になつたつもりはないし、なるつもりもない」「あ……」

綱吉は一瞬動きを止めて、視線をアスファルトへと落とした。その瞳が揺らいで見えたのは、気のせいだろつか。

「……でも、ここにいれば好きなだけ暴れられるみたいだし、面白そうだからこの指輪だけは持つてあげるよ」

そう言って、さっさきからずっと握っていた指輪を顔の横に持つ。先ほどのトンファーと同じように田の光に煌いて、銀色に光った。けれど、トンファーのときのような恐怖を感じさせるような輝き方ではない。

どこか温かみのある明るい煌き。

それを見て、綱吉はふっと笑った。

「はーーありがとうござります」

じゃあ、と言つて今度こそ屋上から去つて行つた。  
バタバタと階段を駆け下りていく音が大きく聞こえて、すぐに小さく下へと遠のいていく。

ぱさぱさと羽ばたきの音がして、黄色い鳥が帰つてくる。

雲雀はその鳥を指先へと乗せ、そのあとに肩へと移した。

肩に乗った鳥はまた校歌を唄い出す。

綱吉が来る前と何ら変わりない風景。

ただ、雲雀だけが先ほどとは違っていた。

ありがとう、と笑つて去つて行った時の綱吉の笑顔が頭に張り付いて、彼の愛する校歌ですらも耳を素通りしていく。

いつものように一緒に歌つてくれない雲雀を不思議に思ったのか、小鳥は歌うのをやめて両足ではね、雲雀の頬をつつく。

「ヒバリ、ヒバリ」

甲高い声で彼の名前を呼んだ。

「ああ、『じめん』

そう雲雀が答えると、小鳥はまた歌いだした。  
それに合わせて雲雀も歌う。

「縁たなーびくー、並森の……」

しばらく歌い、眼下に綱吉を見つけて口の動きが止まる。

山本と獄寺に挟まれて笑う綱吉の顔は、先ほど見た綱吉の顔とはどれも違つものだった。

嬉しくて、楽しくて、そんな明るい思いがすべて表されていくような顔。

雲雀が見たことのない顔。

どうしてこんなにも表情が違うのだろう。

彼がずっと話している、大切に思っている仲間だからか？  
彼らに対する、信頼、友愛の差か。

面白い。

いろいろと変わる表情を見て、雲雀はそう思った。  
それと同時に、苛々する。  
あの三人が群れていることに對してはもううんざりだが、それよりも  
何よりも、自分に対して。

知らない綱吉を見るたびに、そこへ引き込まれていく自分に対して。

今までずっと、だれにも頼らず、頼られることなく自分のためだけに生きてきたのに。

自分が思つたとおりに、風紀を乱すものがあれば噛み殺して、強い奴がいたら闘つてきた。  
すべて、あるがままに。すべて、なすがままで。  
そうやって生きてきた。

誰にも干渉されることなく。

それなのに、狂ってしまう。

沢田。

傷つきたくないのなら、これ以上僕に近づくな。

僕は孤独だからこそ、孤高の浮雲なんだから。

君が想つ仲間のようこ、『恋』なんていらない。

そんなもの、僕は知らない。

## 愛なんて知らない（後書き）

本誌の方ではこんな時間なかつたですよね……。

アニメの方で考えてください。

でもアニメだと、「これ以上巻きこみませんからー」みたいなこと  
言つてゐるし……。

でもそんなこと言つてたらファンフィクションにならないですよね。  
わづかめりへお仕合ごお願ひします。

## もつと離れた場所で（前書き）

雲雀様がヒステリック氣味で、言つてることがハチャメチャです。

カツコいいバリ様、ツナラブなバリ様がお好きな方はお控えください。

よろしい方はどうぞ。



## もっと離れた場所で

イタリアにあるボンゴレの本部に、血に濡れた姿のまま彼は返ってきた。

真っ黒な首元に血が固まり、さらに深く闇に染まっている。

その姿のまま、幹部の者だけが入ることのできる本部の奥、血室へと戻る。

今日中に報告書を仕上げなければならないし、この姿でいることに不快を感じるはずもなかつた。シャワーなら、すべてが終わつてしまつてからでも遅くない。

彼は、血を嫌う草食動物ではないから。

やけに天井の高い廊下を歩いて血室の扉の前へと立つ。  
ドアノブに手をかけて、何かに気づいたのか、表情を変えずに小さく息をもらした。

キイ、と小さな音を立ててノブは回り、扉が開く。

「！」で何してんの

それとほぼ同時に、中に誰かがいると確信したうえで言った。  
誰か、が誰なのか、彼にはすでに分かっていたから。

中にある人物もまた、雲雀の方は見ずに口元に寄せていたカップをかちやりとテーブルに置く。

雲雀が急に声をかけてきたことに驚きもしない。

もちろん、勝手に室内へ入っていたことについての弁解もない。

それどころか、待っていたと言わんばかりにゅうくうとした動作で立ち上がる。

今、この瞬間に雲雀が帰つてくると知っていたかのよつ。

「そりそり、帰つてくる気がしてたんですね、

彼 纏吉はやう言つて、ニコツと微笑んだ。

知つていた、というのはあながち間違いでもないだろ。

「……相変わらず便利だよね、超直感」

雲雀がそう言つと、綱吉は照れが混じつた笑いを浮かべる。

「はい、まあ……。たまに、分かりたくないことも分かつて、嫌になる時もあるんですけど……」

そう言つて複雑に微笑む綱吉は今、誰の顔を思い浮かべただろう。

う。

マフィアという職業柄、死に直面するといつのは当たり前だ。それなのに、綱吉はいつまでたつてもそれを忌み嫌う。

ついこの間、正式に十代目を継いだばかりだとしても、それよりも何度も死闘を繰り広げてきたであつて、いつまでたつても血になれない。

雲雀にとっては至福の時間でもある他マフィアとの乱闘でも、いつも苦渋の表情で早く終わることを願つている。

そのくせ、絶対にその乱闘から眼を離さうとしないのだ。

「で、なに

「え？」

さうしげに微笑む綱吉に、そんなことは全く気にせず雲雀は訊いた。

「何か言つことあるんでしょ。僕には用事なんて、何もないからね」

「…………さうですね。でも、その前にお茶でもどうですか？俺が入れますよ」

綱吉は一瞬言いよどんだあと、自分が先ほどまで使つていたカツブを持ち上げて言つた。

そしてそのまま、雲雀が何も答えないまま、各部屋に備え付けられているキッチンへと向かおつとした。

それをさえぎるように雲雀が綱吉の前に立ちはだかる。

綱吉の身体がびくつと止まつた。

「用がないなら出て行つてくれる？」

「……分りました」

綱吉はもう一度言葉を発することをためらい、雲雀の強い、怖いほどの眼差しを見た後、頷いた。

ぐるりと背を向けると、先ほど自分が座つていた場所へと腰を下ろす。

雲雀にも座るよつて、と手で示した。

それに従い、雲雀はその向かい側へと腰を下ろす。

雲雀が席に着いたのを見て、綱吉はゆっくりと口を開いた。

「まずは……、お仕事、『苦勞様でした』

組んだ手を膝の上にのせ、まさう言つた。

何気ない一言のはずだが、綱吉の言葉に、雲雀はびくつと眉を動

かした。

「俺はこの間、正式にボンゴレ十代目となりました」「知ってるよそれくらい。僕も出たんだから」「はい、そうですね。…本当はその時すぐに言おうと思つていたことなんですが、雲雀さん、すぐに抗争に行つてしまつたので」

綱吉はそこまで言つたのはいいものの、そのあとにつづく言葉を発そとはまだしない。

目がうろうろと泳いで、まるで何かに脅えてるふうにも思える。それを見て、雲雀は中学生だった頃のあの日を思い出していた。

苛々する。

まだ、彼は小さな草食動物のままなのか。

血に濡れる肉食動物を恐れているままなのか。

「……俺はあなたの上司になつた。だからもう、敬語を使つのはやめる。山本も、隼人も、もちろんリボーンも、守護者や幹部はみんなあなたのことを『雲雀』と呼んでいるのに、俺だけそうしないのもおかしいかなと思つて。だから、俺も『雲雀』と呼ぼうと思つんだ。……わざわざ伝えることもないかと思つただけど」

あの時と同じように、決心したように雲雀をまっすぐ見据えて、言つた。

その瞳は揺らいでなどいない。  
ここ何年かいつも見せている、強い瞳。

イタリアへと渡ることになつたときも、九代目が引退し、十代目就任が正式に決定したときも、一度も揺らぐことのなかつた瞳。

それが、雲雀に向けての言葉に迷い、揺らいだ。

そのことが何故か誇らしく思え、また何故か見ているだけで苛々とした。

背筋がぞくりと疼く。

胸の奥から湧き上がってくる、もの。

むくむくと湧き上がってきた怒りは、群れている人間を見つけた時よりも、並中が汚された時よりも強いものだった。

田の前で綱吉が、それだけだよ、と言つて立ち上がる。

何故かはわからない。

ただ、どうしようもなく腹立たしかった。

気がついた時には、浴室から立ち去りつとしていた綱吉を壁へと押し付けていた。

「何言つてゐるの、君？」

「……」

頸<sup>くび</sup>に当たる冷たいトンファーに、綱吉が身体を震わせる。けれど、恐れてはいない。

先ほどよりは弱まつた眼で雲雀を見上げる。

「君がボスだということは認める。この指輪も君がいる限り持ち続けると誓った。確かに僕は君の部下だ」

ぐつと顔を近づけて雲雀は綱吉に詰め寄る。鼻先が触れそうなほど、近づいた。

「だけど、それは名田上での話。僕は君の手下ではないよ。知ってるでしょ、君も。僕は群るのは嫌いなんだ。たとえ、見た目には大空のすぐ下にいても、実は遠く離れている、誰にも干渉されない、されてはいけない浮雲だ。たとえ、すべてを抱え込んでいる、大空でも」

似合わず語氣を荒げ、切羽詰まつた様子で綱吉に詰め寄る雲雀を、綱吉は憐れむような瞳で見つめる。その瞳<sup>め</sup>が、さらに雲雀を苛つかせた。

他の誰とも違う、深く深く潜り込んでくる綱吉。いつも一人でいた。

高く積み上げてきた孤高<sup>フライド</sup>といふ名のフライドが、彼といっただけで崩れ去つてしまいそうだった。

『敬語』という壁があつたからこそ保たれてきた孤高<sup>フライド</sup>。それを君は崩そうというのか。

さらに僕の中へと入りこもうといふのか。

「これ以上に、僕に近づこうとこうのか。

「……これ以上、僕の邪魔をするな

「……

苦しげに眉を寄せる雲雀を見て、綱吉は何も言わない。ただ、瞳を見つめるだけ。

「仕事の話で以外、僕を呼び寄せるな」

「……

「大人しくしていなよ。君は、ファミリーに近すぎる。大空は、誰よりも高い所にいるべきなんだ」

「……

「もつと離れた場所で、世界全体を見守らなければならない」

「……

「そうしていれば、僕は君の邪魔になるような」とはしないよ

「……

「これ以上、僕に近づくな……！」

これ以上、踏み行つてくるな。

他の奴らと同じように僕を扱つな

……。

君のような奴は苦手だ。

分かりやすくせよ、僕の中に踏み込んでくることを止めるのにはできない。

分かりやすいから、真っ直ぐで、傷つけないと恐れないで、踏み行つてくる。

いつも、どこか怯えた眼で僕を見ていた奴らとも。

いつも、僕に従つてきた奴らとも。

他の誰とも、どんな奴らとも違う。

最初はいつも怯えていた僕は、いつの間にか誰よりも強い、高い存在となってしまった。

もう、誰かを恐れることはないのであるが、あの瞳<sup>め</sup>。

あの瞳が僕を見つけるたび、恐れとは違う震えが背筋を走る。

それなのに、今日、彼は何を恐れたのか。

もちろん、僕に対してではないだろう。

それでは、何に。

もしかしたら、僕と同じものに対するだらつか。

誰かの奥<sup>ハコ</sup>へと潜り込んでいくことに對して。  
誰かに、潜り込んでござられることに對して。

誰かのすべてを知つてしまつことに對して。

誰かに、自分のすべてをさらけ出してしまつことに對して。

必要以上に、誰かに近づくことに對して。

それが、何よりも恐ろしく、怖い。

そのことを考へるだけで、調子がぐるりてしまつ。

綱吉とこなだけでそのことを考へてしまつ。

調子が、狂う。

狂つてしまつ。

僕が僕でなくなつてしまつ。

その前に、離れなければ。

その前に、離さなければ。

「僕に、近づくな…………！」

もつと、離れた場所で生きていたよ。

そうすれば、君が傷つくことはない。  
何かを恐れる必要もない。

生きるのに愛が必要なほかの守護者とは違つから。  
あひぢ

愛なんて、そんなもの知らないから。

僕には必要ないから。

僕にまで、そんなんもの愛を分け合えよつとするな。

返すものなど何もない。

いつだってひとりぼっちで生きてきたから。

愛しが、分からんんだ

……。

## もつと離れた場所で（後書き）

雲雀のキャラソンはツナへのラブソングだと思つて妄想しました。  
「愛なんて知らない、愛し方分からない」つて、要するに、「君を  
愛したいけどどうしたらいいのかわからないんだ」つてことでしょ  
？ そつだと私は信じています。で、その相手はツナ。  
山本じや手は震えないし、ティーノも手を震わせたりしないでしょ。  
もちろんムックも。

分かりやすくまっすぐつて言つたらツナしかないでしょー！

十年後でも、ツナが雲雀にタメ口を使つてるのが想像できなくて、  
きっと未来でも敬語なんぢやないかなあ、そつだつたら理由はこん  
な感じかなあ、と思つてできた作品です。

そんなわけで妄想でした。

本文中の、「綱吉の言葉に雲雀はびくつと眉を動かした」のところ  
の理由は、知つていらつしやる方も多いたと思いますが、「(1)苦労様」  
とこう言葉は田上が田下の者に対してもう言葉だからです。雲雀は  
それを知つていて、今までは「お疲れ様でした」だったから、驚い  
ていたんですね。

この先はさらに妄想を深めた思いつきり九年後（？）捏造物語です。  
じまじかのお付き合ひをよろしくお願いします。

## 大空のない世界（前書き）

本誌ネタバレがあります。

## 大空のない世界

それからしばらくして、綱吉はファミリーに最も近いボスとして、マフィア界でも有名になった。

守護者はもちろん、最下層の立場の者まで目を配り、微笑みかけ、ファミリーが欠けることを何よりも嫌つた。

綱吉はファミリーを愛し、同じようになつてファミリーから愛される。ファミリーは綱吉を心から慕い、綱吉もそれを喜んだ。

誰もが綱吉には心を開く。

心優しい、最強のボス。

けれど、そんな綱吉といつまでも距離を置いているのが、雲雀だつた。

何を言われようと誰かに媚びるつもりはない。

僕はファミリーなんて知らないよ。ここにいると思う存分鬪えるからいるだけだ。

それが彼の口癖でもあり、誰とも馴れあわない理由でもあった。

他の守護者や幹部、おもに山本や獄寺に、お前がいつまでも他人行儀だから十代目<sup>ツナ</sup>が悲しそうな顔をしてる、というようなことを言われ、すっかり口癖となってしまったのだ。

あの田の言葉通り、綱町は雲雀には必要以上に近づかない。任務や会議のとき以外は雲雀と顔を合わせないし、ましてや言葉を交わすことなどほとんどなかった。

雲雀はそのことに内心ホッとしていて、なんとか自分を保つことができている。

それが狭く、堅苦しく、息苦しことだとしても、誰かに心を許すよりは何倍もまじなことだった。

「これからもよろしくお願ひしますね、雲雀さん」

その田、綱吉は何年かぶりに任務にまつたく関係のない言葉を雲雀にかけたといひ。

九年前のあの田と同じじ言葉を、あのときとは全く違つ鐘で雲雀に言つたのだ。

彼らしくもない、押し付けるような言い方で。

雲雀がこれからもずっと此処にいると決め付けた上で。

雲雀は声をかけられた時に一度だけ足を止めたが、すぐに何事もなかつたかのように部屋を出た。

その時微かに感じた違和を、彼はもつと深く考えるべきだったのだ。

今更そう思つても、もうすべて遅いのだが。

そして

。

パンツ

。

「……え？」

その日、ボンゴレ中が驚愕した。

その連絡を聞いた途端誰もが思考を停止させ、次の瞬間には泣き出すか、暴れ出すか。

嘘だ、嘘だ、嘘だ！と、喚き散らす者もいたところ。

雲雀も、表情や態度に変えずにいたものの、かなり茫然としていた。

話がつまく飲み込めず、らしくもなく訊き返してしまったほどだ。

その日、ボンゴレ<sup>デーチモ</sup>十代目、沢田綱吉が打たれ、死亡した。

「バカじゃないの、君」

誰もいない森の中、そこにひつそりと横たわる棺に向け、雲雀は言った。

綱吉死亡の連絡が入った後すぐに綱吉の遺体は運ばれ、その明日には追悼式が行われた。

多くのマフィアが集まる中、綱吉はファミリーに永遠の別れを告げ、この小さな箱の中にしまい込まれたのだ。

その後、生前から彼が望んでいた、彼の生まれ故郷である並森へと棺は移され、近年では珍しくなったこの森へと安置された。

雲雀は、誰にも何も言つことなく、一人で懐かしい並森の地へと再び趣き、今、こうして棺桶を見下ろしている。

さあつと風が吹き、彼のすいぶんと短くなつた髪をさらう。

片隅に生えていた小さな花の花びらが風に吹かれて飛んで行つた。

しゃがみこみ、小さな花をひとつひいた。

それを、何も言わずに植の上にのせた。

花は強く吹く風に当たられ、やがて落した。  
しかし雲雀はそれを拾おうとはしない。

「やつぱぱは、いつまでも草食動物のままだつたんだね」

代わりに一つづぶやいた。

綱吉は、ミルフィオーレファミリー・ブラックスペルとの抗争で射殺された。

話によると、綱吉は打たれそうになつた仲間の身代わりになつたらし。

結局、その守つた仲間も、同じ時に殺されてしまったようだが。

ファミリーを愛する綱吉にすればもともな行動だつたかもしれないが、雲雀にしてみればそれはただの莫迦な行動にしかならない。

賞讃の言葉など出せる訳もない、無謀な、莫迦のような行動。

まるで、弱い群れを守るうと肉食動物に立ち向かう、草食動物のようだ。

だけど、君は忘れていたのではないか。

ボンゴレは決して弱くなどない。

ファミリーが一人欠けたくらいではどうなるわけもないだろ？

それは君も分かっていたはずだ。

弱い者は見捨てる。

この数年間、やつやつて生きてきたはずだ。

それなのに、何故、いま。

君は本当に分かっていたのか？

ボス、というのが何であるかを。

確かにボンゴレは、ファミリーが一人欠けたくらいでは絶えることはない。

けれど、ボスがいなくなれば話は別だ。

皆が混乱し、群れは一気に弱まる。

弱くなつた群れは格好の餌食だ。

事実、今現在ボンゴレは危機に陥っている。

だから、僕は群れるのが嫌いなんだよ。

群れなくても一人で生きられるようになれば、強くなどなれないんだ。

「……僕は、近づくなと言つたんだよ」

棺に記されたXの称号を手でなぐる。

「もつと離れた場所で生きていろ、と言つたんだ」

棺桶からそつと手を離し、その上に顔を伏せる。

「こんなに離れるなんて……、フア // コーを見下す」とやめりなんて一言も言つてないんだよ」

小さくつぶやいた言葉は風に流されて、消えた。

「莫迦だよ、君は……」

君は決して弱くはなかつたけれど、頭が悪いんだね。

自分がいなくなつたらどうなるか、とか、考えなかつたの？

守護者まへじは君がいなければ何にもならない。

守るべき姫主がいないのなら、それはもう守護者などではない。

それよつなによつ。

大空がいなくなつてしまつたら、  
雲はゞいひやつて生きていけば  
いんだ。

分かつてるの？

大空のない世界なんて、僕には何の意味もないのに

。

## 大空のない世界（後書き）

この話はすべて妄想です。

ツナが射殺されたというのは本当のようですが、どじとの抗争で、とかはすべて妄想です。

途中話が思い浮かばなくていまいち尻切れトンボですが……、いいんです。

書きたいことは全部かけたので。

評価、感想いただけたらとても励みになります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5071d/>

---

ひとりぼっちの運命

2010年10月10日14時12分発行